

# 生 活



情報局刊「週報」

〈提供 井口金男さん〉

# 戦争体験

●西萩北四丁目  
荒井 夕カ

(明治四五年生まれ)

私も戦争中は若かった。班長や組長を引受けて、動き廻りました。今思うと馬鹿な事でも国民皆勝つまではがん張りますの合言葉でした。

私たちは衣類の商売でした。配給制度点数ですので、やむなく主人も中島飛行機製作所の工員になりました。妻の私は針仕事をしてもらいました。

戦局は勝ちと国民に報じておりましたが、アメリカのB29の偵察が始まり、はじめ一機で爆弾投下が始まりました。二〇〇キロが原橋に落下して、土柵や我が家のトタン屋根をつらぬき空が見え、急ぎ修理する。

三月九、一〇日朝、下町焼野原となる

一週間後浅草橋下車で、主人の元勤め先の吾妻橋を渡ったところの本所業平橋に行って立札を調べて来る。焼跡にめだったのは、商家の金庫と観音様が見えただけでした。その夜何十万の人が焼死なされて本所被服廠跡（しんぷくじょう）に葬られたと聞きました。

恐ろしい夜

空襲警報。サイレンが鳴る。投下された照明弾の明るさは何万燭光あるのでしょうか。一個で真昼のようでした。ふわりふわりと南から北に流れるようにゆっくりと落ちてきました。主人がガソリンくさいと言った。その夜、ちらちらと焼夷弾落下が見え、阿佐谷まで焼けました。

大きい空のタンク

二月の小雪の降った朝の事、現在萩窪中学体育館の所に長さ三メートル以上で、おとな二人で抱える程の丸いガソリン補助タンクをすてていったB29は、大きな飛行機だと感心させられました。編隊にて晴天の日に爆弾投下。ラジオだけの時代で空襲警報のサイレンが鳴り、ニュースが「唯今富士山を右廻りす」と告げていた。と、もう五分たため内に九機編隊です。一万メートル上空のみごとな飛行機は、イカが泳いでいるように見える。

私は組長として大声で隣組に知らせ、自分は壕に入り、ゴー

ゴーという音が聞こえ、座布とんをかぶり、耳をふさぎ、口を開けていると、近くに爆弾が落ち、地震のようにゆれました。次々と五、六回来た日もありました。

五月二四・五日

上町一帯が焼かれる。明治神宮まで焼失致して、ますます戦争は負け戦です。でも新聞などには書かれません。艦載機の速くて小さいピューピューパチパチと弾の音。私は押入れに飛び込む。この時すでに茨城県日立沖に来ていたのです。

物資の事

食糧の配給は日増しにへり、米・麦など手に入らぬようになり、まずいサツマ芋でも行列して買わなければなりません。魚も小さいスケソウダラ、野菜配給、大根・ネギ等も組長が人数配分をする。女たちは田舎に農家を頼って買出しに行く。お金なり物品なりよろこびそうなものを持って、当時木綿もの手拭一本米一斤きんと言われました。

豆かす入りさつま葉の雑炊暮しです。子供の多い人ほど苦勞致しました。駅前の食堂に私も行列して食べに行きました。サツマ芋を食べたく、稲毛まで夫婦して農仕事を手伝って三キロ買って来ました。郷里の駅でジャガ芋の内に米袋を入れて検査におびえた事、空地を畠にして里芋を作りましたが、収穫二、三日前に子芋を全部採り採られ私の口には入りません。

お棺の無い葬儀

昭和二〇年九月の事、ウソでない話です。死者が出てもお棺の板がないので、一回使用すると次の人のために板を持って行き、やっと私達は主人のもと勤めていた時のご主人Kさんの葬儀を致しました。それも荷車を借り、建物疎開致した田無まで運んで来た板がありましたので、間に合ったのです。現在の葬儀の金ピカの霊柩車なんてとても考えられません。あの日の事を思う時、物資の無い事がひしひしと思ひ出されます。

私も年を重ねて満八〇歳となりました。戦争体験記を私なりに書きました。私は弟が三人おり、三人とも出征致し陸軍に二人、海軍に一人。フィリピンにて戦死した弟を思い出し涙する姉です。海軍通信学校に入った末弟がシベリヤから舞鶴に着き、電報に父と共に迎えにいきました。上野駅のホームに水ぶくれの顔立ちで栄養不足の様子でした。でも帰って来てくれて嬉しかったです。当地に住み、焼かれず今日まで過して来ました。当地井萩二丁目でした。

たくさんの戦争未亡人の方々や現在もシベリヤの島々に遺骨がさらされていると思います。戦争をしてはいけないと思います。

中国からの残留孤児の方々に胸を痛めながらテレビ時代となり、年寄も年金など戴いて暮せ、幸福な事です。

# 戦争体験

●高円寺南二丁目

石橋 照子

(大正一五年生まれ)

物の不足、町中品物が姿を消しどこへ流れてしまったのか、耐乏生活をよぎなくさせられた。我が家は一〇人の大家族で祖父、祖母、父母、子ども六人。幸い父が日本橋で二代続いた医療機械店を営んでいたので、少しは食糧も手に入ったが、次第に底をついた。母と着物を持って農家に行き食糧にかえ、重いリュックサックをかついだのが思い出されます。学校の地下には陸軍の兵士が待避していて、ものものしい毎日でした。

学生だった私も動員され、三鷹の中島飛行機に行き、朝は暗いうちに家を出、夜も遅くなるのでよく駅に母がむかえに来てくれました。中島飛行機は生産工場ですので、空襲のたびに目標にされ爆弾が投下され、多くの方が犠牲になられお気の毒でした。学徒でしたので空襲のたびに避難出来たのですが、初めのころは防空壕もなく自分の好きな所、今思えば井の頭公園の方まで避難したような気がいたします。

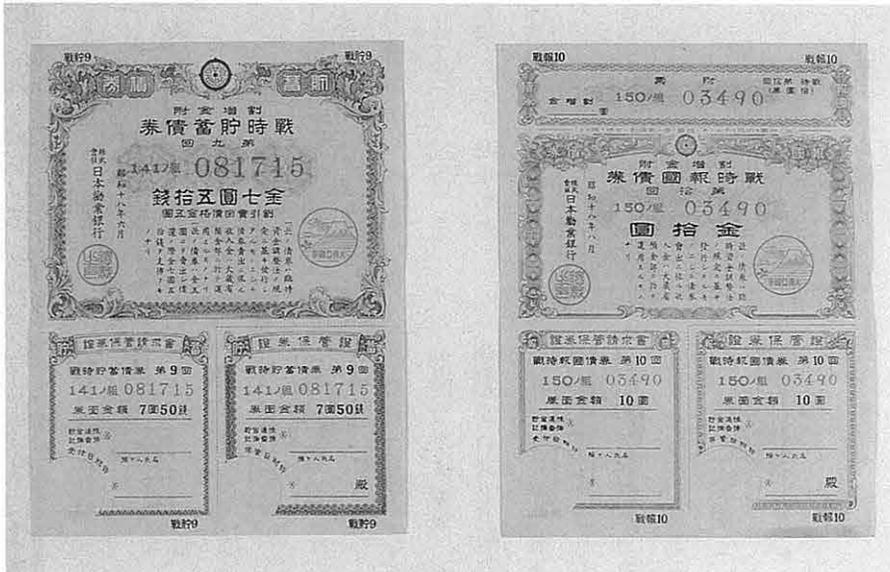
戦火も日増しにひどくなり、我が家も防空壕を掘り、内側にセメントをぬり、非常食やら衣類を入れて万全策をとりました。

した。ところが、長雨が降り上のフタの間から水が入ったのでしよう、カメに入れておいた大豆から芽が出てモヤシになっていたにはおどろきでした。気丈な祖母は空襲になっても防空壕に入らず、畳の上で死ぬとがんばっておりました。三月の空襲で三階建ての日本橋の店も焼夷弾で焼失し、あたり一面焼野原と化しました。

いよいよ東京も危険になり、トラックをチャーターし、山梨県韭崎に疎開する事になりました。夕方農家の大家さんが白米の御飯と、とろろ汁をたくさん作って下さり、馳走して下さいましたが、とろろ汁の大嫌いな私は食べることも出来ず、漬物ですませました。あくる日は天皇陛下の放送があり、終戦となってしまいました。一日違いで疎開しなかったら良かったと思いましたが、時すでに遅しで不自由な生活をする事になり、暮れにやっと我が家にもどれました。小学校の学童疎開していた妹弟たちも無事にもどりましたが、栄養失調で頭髪がぬげ、戦争の恐ろしさを思い知らされました。

祖父、祖母、父、母も亡くなり月日の流れを感じます。飽

食の時代、町中品物が溢れ過ぎ夢のようです。物を大切にすることを忘れ、町角のゴミの山、まだ使えるのにと思うこのごろです。



(右)戦時報国債券 10円  
(左)戦時貯蓄債券 7円50銭

〈提供 井口米子さん〉



また大騒ぎになりました。結局は間もなく通勤に変わったのですが、学生の不信は解けないで、工場と決定的対立になってしまいました。朝出勤して出席をとり、モーターが始動しても仕事はあまりしないし、機械（センパンが数台でロクロが大部分）の扱い方を覚えれば、適当に仕事をして精度は一〇〇分の二、三を要求されます。あとは内職を覚え、タバコはすうし、工場では見て見ないふりでした。

工場の昼食ではとても足りません。町に出ては外食券食堂でよく食べました。あとから考えると恐らく親が旅行者用食券を手に入れて子供に与えていたのでしょう。東京精螺製作所は軍需工場といっても、小さな町工場、親会社の日本無線からはもちろん軍からの視察は一切なかったようです。学校、工場は外部に洩れないようひたすらに隠していたのでしょう。工場は割り当てられたので学生を受け入れ、大へんなお荷物だったと思います。また不馴れによる学生労務管理が充分ではなかったと思います。

工場長は当時三〇代でした。担任教師も変わりました。昭和一九年一月からB29の超高々度爆撃がはじまりました。三鷹近くには中島飛行機製作所がありましたので、まっ先にねらわれました。目標をはずれた一トン爆弾が工場近くに落ちた時には、さすがにびっくりしました。防空壕に入っていました。ズズ、ズシューと腹にこたえる音がしたと思っただけで周囲の土が大きくくずれ、もう駄目かなと一瞬思った位でした。

空襲解除になってみにいきました。武蔵野郵便局近くの道路に円錐形の大きな穴があいていました。いく抱えもあるケヤキの太木が横倒しになっていました。それこそ車が何台も入るような大穴に見えました。

当時の情報は新聞とラジオだけでした。新聞といっても二ページだけで、夕刊は発行中止されていました。ラジオをきくのは警戒警報、空襲警報、あとはニュース、中学生にとつて面白いものではありません。あとはロコミで伝わってくるニュース、もちろんデマもあったし、戦後になって、本当のことだったと知った事もありました。あとB29が落とす伝單。いろいろひろいました。その当時あまり信用しませんでした。なにしろ中学生、感覚的に違いすぎました。

昭和二〇年、東京大空襲があつて、この夜は荻窪にいて、夜一二時ごろでしたか東の空がポオツと赤く見えたのを覚えていています。

同年、中学を卒業、工専（旧制工業専門学校）に入りました。もちろん学業はなくて工場は埼玉県豊岡町（現入間市）にありました。もう通勤は不可能です。それでも毎週帰宅が出来ました。母親に頼んで新聞は全部とっておいてもらって、毎週帰宅しては一週間分よむのが楽しみでした。今でもその当時の新聞を大切にしています。

工場の資材は底をつき、従って仕事は何もありません。ただ米艦載機に追いかけれロケット砲に脅えながら、それでも遠くから見るときはすごいなあと感じました。したりしました。

た。

昭和二〇年八月一日、玉音放送をききました。ラジオはただガアガア、内容もよく分からないまま、戦争が終わったというので、その夕方帰宅してしまいました。戦争が終わって何がうれしかったとって、夜まつくらだった町が明るくなった事でした。

昭和二〇年九月上旬だったと思います。新宿駅小田急線ホームに米軍が完全武装でホームに溢れていたのを今でも覚えています。これが最初に見た米兵でした。

一六、一七歳の少年が見た、昭和一九年、二〇年のスケッチです。



戦時報國債券 5円

〈提供 井口米子さん〉



# 銃後日記の一こま

●松庵一丁目

岩出 豊造

(明治四十二年生まれ)

最近ふとしたことから古い一枚の写真を発見した。

思い出を辿れば、当時住んでいた中野の鍋屋横町の我が家の玄関先で、二人の凛々しい出征兵を、我が家の家族が囲んでいる記念写真であった。早速古い日記を辿ってみて、ようやくそれが昭和一六年のことと判った。今から五一年前のところは、昭和一〇年代前半の日中戦争による軍需インフレで国内は潤っていた。無論、それは嵐の前の短い晴間に過ぎなかったが。

当時応召者の歓送は町内挙げての派手な華々しいものであった。ところが昭和一六年六月二二日、独ソ戦争が始まるや、日本は密かにソ満国境に兵を増強し、背後からソ連に圧力を加えんとした。従って、防諜上からそれまでのような派手な歓送行事は一切厳禁となった。そして大動員が行われるや、応召者は密かに民家に分宿して目立たぬように待機した。

昭和一六年当時の私の日記は明らかにこれに触れていた。

一月二八日——夕刻、新人会の席上、T氏の国際情勢に関

する講演を聞く——日米必戦論、四月ごろが危機という。

二月二八日——新人会講演にてA氏の話を聴く。終了後、

幹事室にてしばらく同氏を囲み語り合う——泰・仏印間の調停が暗礁に乗り上がることを憂慮され、そのもつれから日米間に戦端が開かるるを憂慮されていた。

四月四日——新人会の会合の最中、商工大臣、企画院総

裁更迭の報入る。両ポスト共海軍軍人が任命された。甚だエキサイティングだった。

七月一〇日——朝八時三〇分友人・M君応召出発。今回よ

り歓送行事は防諜上より一変して一切厳禁、目立たぬようにせよとのこととなる。

七月二三日——近いうち我が家に出征兵二名分宿の通知を受く。

七月二五日——独ソ開戦の新事態により我が国の動向も顕著に変化してきた。その大なる現れが七月

以降相次ぐ大動員である。それは地方的なものでなく全国的なものとの風説専ら。

七月一七日——兵士二名来泊。H（千葉県）、N（埼玉県）の両君。夜一二時近くまで二階にて語り合う。

知人の話によると今回の大動員は甚だ大規模で、これら部隊をソ満国境に配置し、ソ連に威圧を加え、もって独軍の士気を鼓舞し、対ソ戦を枢軸側に有利に展開せんとする意図に基づくものという。

七月二〇日——H君いよいよ出征と決まり、第一装軍服を受取り来たる。東部第七部隊市川隊に所属するという。出征の方面は北支だという。

七月二三日——滞在中の二兵士はハルピンより更に北東の遼河に赴くらしいという。

七月二五日——夕刻帰宅。いよいよ明朝部隊進発のためH・N両君と記念撮影し夜食を供にしビールにて乾杯。席上記念に日の丸扇子を両君へ贈る。

七月二六日——朝九時両君いよいよ出発。H君は堅固なる精神力の持ち主。N君はいかなる環境に在っても超然たる楽天主タイプ。両君共ソ連国境の自然の猛威を甘受し、立派に任務を遂行し得る人と信ずる。両人の留守宅に

はそれぞれ無事出立の旨を発信す。

七月二九日——H君母堂、N君令閨・令兄よりそれぞれ返事をいただく。

八月三日——過日七月二五日撮影の写真を両君の留守宅に発送す。

両君と再会を固く約したが、……しかし今日に至るまで両君より連絡は全くない。嗚呼。

